No. 12（1986. 03）

巻 頭 言

言葉に責任を持て

「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。この言葉は初めに神と共にあった。すべてのものはこれによってできた。できたもののうち，一つとしてこれによらないものはなかった。この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった。」

これは新約聖書ヨハネによる福音書の冒頭の言葉である。ここで言葉とは神そのものであり，言葉はしもべである民衆に対して絶対であり，この言葉は神と民衆との契約と解釈されている。

旧約聖書を繙（ひもと）けばわかりますが，神ととりかわした契約に違反した者は，神の罰によって雷にうたれたり，焼き殺されてしまいます。このように神ととりかわした言葉は重く，死をもってあがなう程のものです。

さて現代社会において言葉は情報・意志を伝達する手段として用いられています。オーケストラには楽譜があります。すべての演劇にはシナリオがあります。舞台装置，照明，音楽などがそれぞれの演出家によって文字や記号で表現され，絵画として，光として音として秒読みで舞台のストーリーの展開とマッチしながら進んでゆきます。

科学史に残るような大発見もすべて天才の脳にひらめいたストーリーが数学の記号として，模式図として言葉として展開され，やがて実験によって実証され，修正されて確立されたものです。今日の科学技術はこのような発見がいくつも，いくつも集積されて成立したものです。

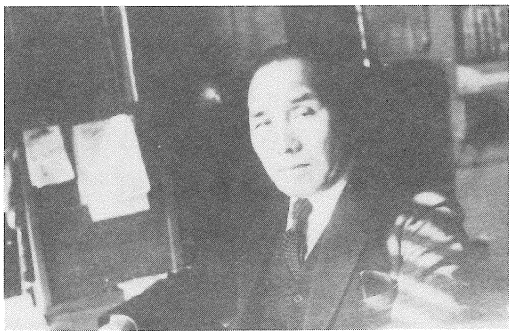
毎日のテレビの意味のない言葉の遊びも，貿易摩擦の対策のような国と国の間の契約も，その結果が数百万人の生命をも失うような戦争宣言さえも言葉によって表現されます。「男に二言はない」などというように，言葉は重く大切なものであります。

重大な結果を伴うような言葉には，くれぐれも注意し，大切にすべきです。何か不純な意図をもって，その目的を達成しようというような言葉には重ね重ね注意することです。重大な場面において場当りな都合のよい言葉を使ってはなりません。必ずその言葉によってお互いに傷つき，裏切られ，どこかに無理を生じて，折角の信用や友情も失われ，罰はその言葉を口にした人にやがてかえってきます。

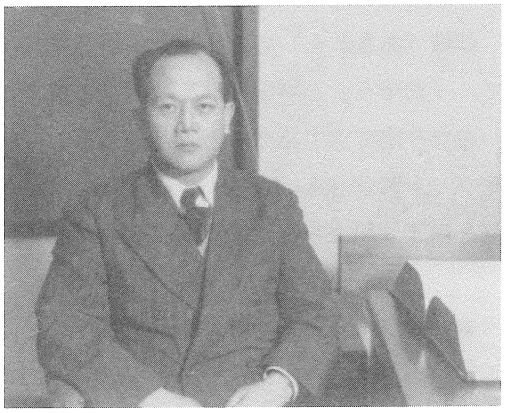
世の中のすべての人に美味しい言葉などあり得ません。誠意をもって二心（ふたごころ）なく事にあたれば，ときのその人の言葉がある人々にとって不利な過酷な言葉のようであっても，長い目でみてその言葉は（これはある決定であったり，裁定であったりする）止むを得なかったことが，理解され，評価されるものと信じております。これを先人は「神のみぞ知る」とか「この決断

の当否は歴史が明らかにしてくれるでしょう」と申しております。

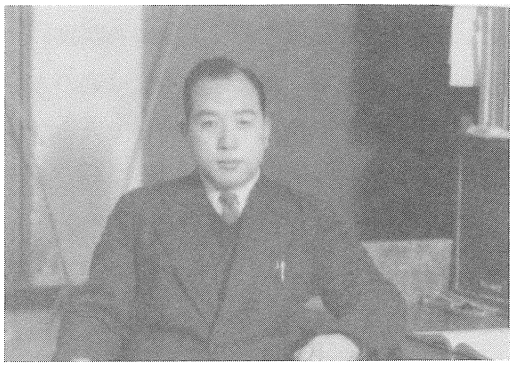
これから社会に出て働く諸君は，よく，よくこのことについて注意し，かりそめにも自らの言葉によって人を傷つけることなく，他人の言葉によって侵されることなく，日常の誠実な言葉によって自らの新天地を開拓していただきたいものです。　（顧問教授：笠井芳夫）



江崎伸市先生（138，151頁参照）



斎藤謙次先生（138，152頁参照）



松井嘉孝先生（140，151頁参照）

No. 13（1987. 03）

巻頭言

ジョギング

寒風を突いて早朝の畑道（はたけみち）を息をはずませて走る。指先や顔はこごえて冷たいが，トレーニングウエア一枚でも，身体はさほど寒さを感じない。フトンから出る時は，気が重く身体もだるく，“今朝は止めた！”というような朝でも，走りだすと気分が乗ってきて，何やら生きる喜びのようなものに変わって行く。

ジョギングと言っても，一人で気ままに走るのであるから，冬には七時頃から，夏には六時頃から走り，距離もせいぜい２km位であるから特別に肉体的負担となるわけではない。

始めてもう十年以上になるが，一寸体調を崩したのがきっかけで，一年半程休んでしまったが，昨年８月から大学の仕事も一区切りつき，心のゆとりも出来たので，また再開した。

朝練（あされん）のため小学生が三々五々（さんさんごご）登校する。後ろから走っていって，「お早う」と声を掛ける。中学生が向こうから足早にやって来る。あの角はオートバイがいきなり出てきて冷やっとしたことがあったな…。気を引き締めて通らないと危ないぞ，あのヤクルトおばさんはもう十年以上もオートバイを駆って朝の町を家から家へと配達しているが，何と頑張り屋だろう！太陽が丁度上がって，その中を走るのは何と気持ちがいいんだろう！

走り終わったあとの軽い体操も気持ちが良い。冷水を二，三杯かぶり，フウ・フウ言いながら深呼吸をする。ロンドンで買ったKentのボデーブラシで全身マッサージする。何やら充実感と言うか，自己満足と言うか。今日もやるぞという気分になる。

昨年の暮れのある朝，前の晩の残り湯に入ってみた。冷えた身体には温かくて気持ちが良い。この頃では病みつきになって，走ったあと必ず残り湯に入っている。ただ寒い朝には底の方が冷水になっていて，足と尻が冷たい。野次喜多道中記には五衛門風呂に下駄を履いて入る話がある。“残り湯にも下駄が欲しいな”と思ったりするが，小原庄助さんは“毎朝新湯（あらゆ）を沸かしたので身上（しんじょう）を無くしたが，残り湯ではそんなこともあるまい”と一人嬉しがったりする。また新しい楽しみが増えたという感じである。

若いころには，夏でも腹巻をして汗疹（あせも）だらけになっていたものだが，おかげさまでこの十年来腹巻をしたことがない。冬でもパンツとステテコ一枚で過ごせるし，寝る時も昔は下着の上にタオルの寝巻を着て，アンカを入れて寝たものであるが，最近では薄い着物一枚である。暖かくなったらパンツ一枚，はだかで寝るのに挑戦したい。

ある朝，日頃走る方向とまったく反対の方向に走ってみて，驚いた。そこには見る方向が違うというだけで，全く別の風景が展開して来るではないか！“人間の感情とか物事の理解の仕方などはその時どきの精神状態によって変わるものだな…”としみじみ思う。心すべきことではある。

このようなジョギングの楽しみも初めの動機はまったく単純であった。あるコンクリートの先生が毎朝走っている…ということを聞いて，“そんなことなら俺にもできるぞ”とはじめたものである。走ったあとの軽い体操は“金井清先生*の十分の一でも真似をしてみたい”ということである。

昔から言い古されている言葉ではあるが，「ものごとは続けることが大切である」。始めは真似でも長く続けるうちに自分に合ったやり方や，楽しみ方が産まれて来るもので，これは仕事でも研究でも全く同質のものであろう。「また，始めることは易しいが，続けることは難しい」とも言われるが，これも真理であろう。惰性のようでも，何か意義のあることを続けることはそれだけでも評価されるが，わが愛する日大の校歌のように「日に日に新たに……」成長して行くならば，更に素晴らしいことである。

材研の諸君，志を高く掲げて，前へ前へと不屈の歩みを続けたまえ！

（顧問教授：笠井芳夫）

＊金井清先生は地震と建物の振動について研究され，地盤の微振動や振動測定装置などの世界的な研究成果をあげ，朝日賞を受けられた。2008年，100歳で逝った。左から若木滋先生，笠井，金井清先生，坪井善勝先生，矢代秀雄先生（1977年頃）

No. 14（1988. 03）

巻頭言

この世はかわるもの（無常）と心得よ

よく晴れた２月中旬，左手にオペラ「お蝶さん」の舞台となったグラバー邸の建つ長崎の山手を望み，右手間近に造船所の大ドックを視ながら，大波止（おおはと）から船で40分程のところに高島があった。高島は三菱石炭鉱業株式会社高島鉱業所として最盛時には年間127万トン出炭していた。閉山の前年，昭和60年度には58万トンと落ち込んだが，高島から７～８分の端島（通称軍艦島）と共に三菱の石炭山として，戦後の経済復興から高度経済成長時代のわが国のエネルギーの供給に大きな役割を果たしたところである。高島は僅か1.3kmの岩山の島で15,000人以上の人が住み，端島と共に約２万の人口を擁した鉱山も今は人口約1,500人とかで，端島は全く無人島になっている。飽食の時代にドン底に叩き込まれた島である。この島を訪ねることになったのは，閉山により鉱山の人達が職を失い山を去ったため，多数の鉄筋コンクリートのアパートを実大試験体として，「火薬による瞬時解体発破実験をやろう」ということになり，その下見のためであった。

何はともあれ，残されたRCのアパート群を調査し，実験に適した建物を探すことになった。岩山の段々に建つ１階６戸，６階建の無人となったアパートに近づくにつれて，あるものは人口に荒板を打ち付け，あるものはガラスが割れ，雨戸が外れ，玄関のロックが壊されたりしているが，外回りの建具は潮風を考慮してのことと思うが木製であったため，ペンキがはがれ荒れてはいるが，腐ってはいなかった。ベランダや窓の手摺りは鉄製のため赤く錆びて，何とも異様というか，とても戦士（つわもの）どもの夢の跡というには生々しく，気の滅いる光景であった。

室内に入ると，きれいに雑巾を掛け，全く無一物になっているところもあれば，台所の食卓の上にはお盆が置かれ，湯呑み茶碗が６～７ケ整然と伏せてあり，電気釜が残されて，子供のおもちゃが置いてあり，いつでも帰って来て，また明日から住むことができる様な部屋もあった。中には部屋の中央に畳から寝具，衣類まで雑然と積み上げられ，本当に投げやりに，最後の船に飛び乗るために出ていったような部屋もあり，住んでいた人の心のありようがそのまま残されているようで悲しく，寂しいおもいが迫り，身につまされた。

唯，不思議なことに，もう１年以上も空き家でいるのに，どの部屋にも全くといっていい程ほこりがなく，どこを手の平でこすっても汚れていなかった。四面海で囲まれて，外からほこりがやって来ることがないためと思われるが，ほこりというものは人間が住むことによって生

ずるものであることがわかった。

各戸のドアに張られた「合理化で山を守ろう！　いま一息頑張ろう！」という必死の願いのこめられたステッカーを見ると，どのような部屋を残して立ち去っても，とても，とても，かつての住人に批判めいたことの言えるような情況ではなく，一様にこの方々の不運を嘆くほかはなく，辛く悲しい　やりきれない思いがした。

さて，わが国の石炭産業は，北炭夕張で昨年末閉山があり，世界的なエネルギー事情の変化により壊滅した。振り返れば，昭和30年頃，三白景気ともてはやされた砂糖，肥料，セメントのうち，前二者はとっくに駄目になり，セメントさえも今日構造不況に陥っている。世界第二位を誇ったアルミニウムの製錬もオイルショックで電力料金が値上げされ10年も前に完全に潰れてしまった，昨今では，造船業が円高とアジアの新興工業国に追い上げられ，さしもの来島ドックグループも解体に追い込まれてしまった。「鉄は国家成り」と自負したわが国重工業の屋台骨である鉄もまた構造不況にあえぎ，自動車産業さえも海外に工場を移して，生き残りを計ろうとしている。

このように好むと好まざるとにかかわらず，この世（社会）は移り変わるもので，30年，40年間と同じ会社から給料をもらい，大過なく勤めて人並に働けば，部長，課長になれ，あわよくば役員にまで行けるという訳には行かなくなって来ている。国鉄でさえ，民間会社に移行する時代である。

こう言う激動の時代を生き抜くには，何が起きても対処できるように日頃から心掛けておかなければならない。それは会社に対する忠誠心がどうの，こうのというような次元でなく，ひとり一人が社会を構成する個人の確立という意味で必要なことである。そうした個人によって企業が支えられる時代がやって来たということである。

危機がやって来たとき，助けてくれるものは，人間的な縁（えにし）である。それは学生時代に培ったクラスメートかも知れないし，また企業の中で醸成された信頼関係に基づく同僚や上司あるいは部下であるかも知れない。

あるいは，ライバル企業の人々，下請の社長であるかも知れない。趣味の仲間かも知れない。ともかく信頼に基づく良い人間関係を創っておくことが，リスク（危険）に備へる道である。

諸君，どのような会社を選んだとしても道は平坦ではない。居眠りしていても給料をくれるような会社はもうないんだ！　ということを肝に銘じて毎日を生き抜いて欲しい。

やや寂しい話になってしまったが，仏教では昔から「諸行無常」といっているようにわびも，さびもこの無常観（変わらないものは何ひとつないという考え方）によっているのである。

冬はいつか終わり春が来る！眠られぬ夜もやがて必ず朝を迎えるものである。

（顧問教授：笠井芳夫）

No. 16（1990. 03）

巻頭言

ワープロでダウンの記

師走21日（木曜日）の晩と次の日（金曜日）の午前中大学に出て，ワープロに入力されている年賀状の住所録の訂正を行った。終わったときは何もなかったのに，午後，会議があり，３時頃部屋に帰った時からおかしくなった。

先ず首が前後左右に曲げられなくなり，後頭部の筋肉の付け根が痛くなり，大変なことになった。次の日は土曜日で東京に出た帰りに鍼を打ってもらった。少しは楽になったが，一時は寝起きが独りでできず，おかみさんに手をかしてもらう程であった。１日置いて月曜日，病院に行き，首のレントゲン写真を撮ってもらった。首の骨はなんでもないと言われ，いくらか安心した。

火曜日から近所の接骨院に行き，物理療法を受けることにした。接骨医は腫ものにさわるようで，「本質的な治療というわけではありませんが，首を引っ張りましょう」と言われ，６kg程の低い力で引っ張ったり，緩めたり，１回／40秒位のサイクルで懸引を行い，同時に肩たたきと同じショックを両方の肩の筋肉に電気的に作用させ，これを20分程行う。引き続いて20分程うつ伏せになって赤外線を首と肩に照射して温め，軽く指圧し，最後に首筋を軽くもみ，タイガーバーム（はっかの入った漢方の油薬）を少しすりこみ，湿布薬を貼って包帯をし，一連の治療を終わる。この時，接骨医は，「ひたすら寝て首筋を休めることが一番の治療です」と言われた。それに加えて，「重いものを持たないようにして，原稿を書いたり，テレビを余り見ないように」とも付け加えた。この時程，自分の頭の質量が大きいことを意識したことはなかった。

年が明けて，正月２日から家の掃除をした。毎年悪いくせで，暮れに掃除をせずに正月まで仕事を残してしまうのである。窓ガラスを拭いたり，台所のガス台やらその周辺の汚れた油をせっせと取り除いたりした。そして６日の日に一寸とした新年宴会をやり，何やかやと動いたせいか，また少しぶり返した様な気がした。幸い８日までは大学が休みであったため，１日の半分は寝て過ごした。将に寝正月である。

さて，「ワープロによるダウン」の原因を考えてみると，先ず照度の不足した部屋で，こたつの上に安いワープロを置き，悪い姿勢で目を凝らして，住所の訂正などをしたこと，それから，後日聞いたところでは，コンピューターなどを打っときは，手首や肘などを机について仕事をするのが良いと言うことであった。低い炬燵（こたつ）においたキーボードを腕を上げて指先だけで

打っていると，肩に無理な力がかかって不具合が生じ易いとのことである。若い頃には全く考えられなかったことが起きてくるのである。これまで肩が凝るということがなかったが，実は今考えてみると，これが問題であった。材料の性質にたとえれば，軟鋼を引っ張った時，降伏点を越えれば，大きなひずみを生じて危険信号が発信される。ところが，炭素の多い硬い鋼は強度は大きいが，伸びが小さく，引っ張り力が限界を越えると，いきなりプツンときれてしまう。私の首筋はこの硬い鋼と同じでダウンするまで気がつかなかったようである。

さて正月20，21日を過ぎた頃，要するに発病してから１ヵ月位した頃から，うそのように良くなりだした。これは良かったと思ってはいるのだが，東京へ出て夜遅くまで委員会に出たり，原稿を書いたり，総選挙の党首討論会などテレビを２，３時間も見たりすると適面に調子が悪く，接骨医からは「一寸油断するとぶりかえしますよ，皆さんそうですから」などとおどかされ続けているのであるが，只今２月５日も一寸無理してこの原稿を書いている。ただ，ただ，ぶり返さないように祈るのみである。

何れにしても若い頃と違って，無理が利かなくなり，一旦調子がくずれると，回復するのに何日もかかってしまい，下手をするともう治らなくなってしまう。言い換えれば，人は必ず歳をとるし，老化現象を避けることはできない。

朱熹（しゅき）の歌
少年老易く学成り難し
一寸の光陰軽んずべからず
未だ覚（さ）めず池塘春草（ちとうしゅんそう）の夢
階前の梧葉已に秋聲

詩の大意は：少年は若い若いと思っていてもすぐ年を取ってしまう。わずかな時間でも大切にして，学問に努めなければならない。若いときは夢が多くとかく勉強を怠りがちであるが，すでに庭先のあおぎりの葉は黄色くなり秋となった。（まだまだ成すべきことがあるのに，私も年をとってしまった！という意味）

いつも私自身考えていることだが，棺桶に足を半分突っ込んだとき，俺も何やら頑張ったぞ！地球を一寸ひっかいたぞ！　と思えれば，それをもって「何事も嘉（よ）し」としなければなるまい。

若い諸君にこんな話をしても身を入れて聞いてくれないかも知れないが，ともかく，今は知力，体力，何れも活力に満ちているのであるから，毎日を精一杯生きてもらいたい。

（顧問教授：笠井芳夫）

No. 17（1991. 03）

巻 頭 言

中国・清華大学滞在の記

夏とは言え，あづま屋の日影に座していると，遠く池を渡ってくる涼風が心地よい。子供達が蓮池の縁から手を伸ばし，大きな蓮の葉を手折り，頭にかぶって遊んでいる。

向岸の道沿いに柳の並木が続き，自転車に乗った学生が，そして主婦らしき人が往く。もう小一時間も私はここにたたずんでいた。

この風景は私の少年時代の田舎の心象風景でもあり，また1950年代の東京郊外の風景と重なるものであった。蓮の台（うてな）のイメージと重なって，パラダイスに座すという，大変ぜいたくな「いい気分」に浸っていた。

これは，昨年７月末に１週間程中国・清華大学に共同研究のため滞在したときのある日のことである。清華大学は北京市の北西に位置し，理工系大学として評価の高い大学である。道路を隔てて，名門北京大学が位置している。ちなみに北京には大学が約50校あると聞いたが，さすがに人口12億の大国であると思ったものである。

清華大学の敷地の広さは約1. 6×2. 0kmである。わが津田沼校舎の敷地面積92, 478m^{2}に対し，約35倍の広さがある。

この様な広大な敷地に，建築系，土木系，機械系，電子系，数学系，物理系，経営学系，社会学系など23系（学科）が設置され，４つの付置研究所を持つ大きな大学である。中国全土から選ばれた学生と教職員およびその家族が全員この敷地の中に住み，恐らく２万人位の都市を形成しているといってもよかろう。

私が滞在した留学生寮の場合，RC造２～３階建で300室以上部屋があり，各室ベッドが２台入っているので，600～700人の留学生が宿泊することができる。それぞれの部屋はバス，トイレが設けてあり，学生の寄宿舎としては申し分のないものであった。

留学生は主にアフリカ，インドネシアなどの人であるが，そのほかの国々からも来ているようであった。広い食堂，専用の運動場などをもっていて，さすがに大国ではあると感心した。

さて私のように昭和ひとケタ生まれには，中国というと租界（治外法権の外人居住区）という言葉が忘れられない。現在の中国へ来てみると，いわゆる租界は存在しないが，高い塀で囲まれたひとつの社会という意味では中国中いたるところこのような社会がある。清華大学もその例外ではない。ここには，全教職員のための住宅，大部分が鉄筋コンクリート造５～６階建３LDK程度のアパートとこれに付随して幼稚園，小学校，中学校，病院，出版社，銀行，百貨

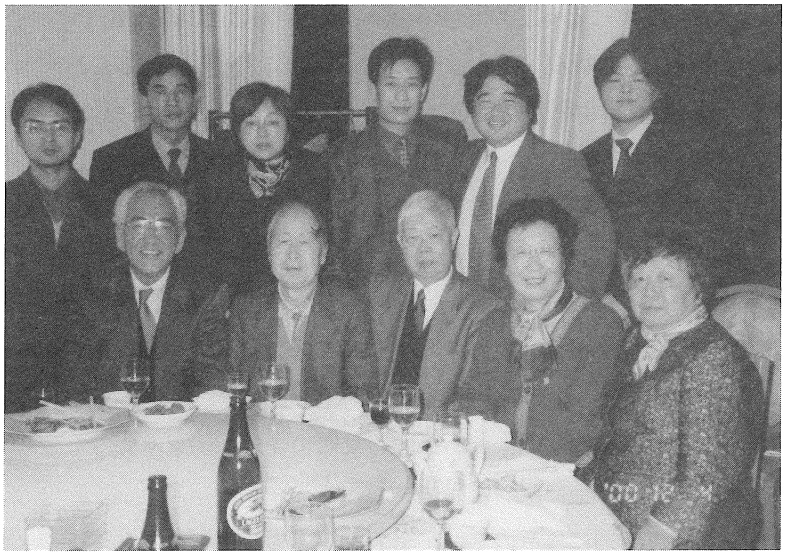
店，交番，大浴場４ヶ所，大食堂13ヶ所と特別食堂３ヶ所などが敷地内に分散している。

両親とその子供が清華大学の教員や職員になっている例も多いようである。この塀の中の社会については，１昨年，天津のセメントプラント設計研究院を訪問したときにも，ひとつの囲いの中に3,000人以上住み，一家５人この研究所に勤めているという例もあることを聞いた。社会主義国として，「働かざる者食うべからず」の原則が守られているのかも知れない。

さて，話を元に戻そう。この心地よいあづま屋に座して，「何がそんな気分にさせるのか？」と考えてみると，自動車が通らないということのようであった。空気はうまいし，騒音はないし，ほこりはたたないし，「自動車のない社会はいいな」という気分であった。

帰国前日の晩餐会の席上，私は本気でキャンパスの中の自動車を増やさないで欲しい，現在の環境を保っていただきたいとお願いした。また中国は大陸であるから環境汚染が始まるとその地方全体が汚染され大変なことになるとも申し上げた。列席された先生方に私の発言の主旨がどれだけ受け入れられたかわからなかったが，ともかく，これは私達が本気で取り組まねばならないことである。この平成太平の世に中東の戦争はこれからどう進むのかわかりませんが，この地球船に一瞬だけ住むことを許された諸君，近いところは歩き，次に自転車に乗りましょう！そして，自動車やオートバイに乗ることを少し減らすように心掛けようではありませんか。そうすれば諸君の子供や孫が快適にこの船に住むことができるのです。

（顧問教授：笠井芳夫）



清華大学・馮乃謙先生夫妻（前列左から３人目と４人目）関係者と笠井，松井，湯浅らで中国料理を囲む会

No. 18（1992. 03）

巻頭言

国際化の時代

今日では，JRでも地下鉄でも電車に乗ると，必ずと言っていいほど，外国の人々に出会います。お互いの会話を聞くともなく耳にして，はじめて外国の方だとわかることもしばしばです。あたりまえと言えば，その通りで，日本人のルーツはモンゴルや，東南アジアにあると言われているのですから，容貌などで見分けるのが困難であっても別に驚くことは ありません。
それにしても世界中から多様なルーツを持つ人がやってくるようになりました 。今から15年程前，英国に滞在していた頃，ピカデリー・サーカス（広場）に出掛けるたびに，大勢の多様な民族の人々が，弓を引くビーナスの像の台座に腰掛け，たむろしておりました。「ここは民族のるつぼだな」と思ったことでした。

東京も早晩，渋谷，上野，新宿，池袋などの街角の何処かに言語，衣服，皮膚の色や毛髪・目の色などの多様な人々の集まる場所ができるでしょう。そうして，多様な民族の血がこの国の子孫の中に入ってくることと思います。

かつて８世紀頃わが国の俊秀は海を越え中国大陸の仏教文化をわが国に伝えました。その中には遠く長安（現在の西安）の都にまで行き，遂に帰国することなく彼地で死んだ「安倍仲麻磨呂」のような学僧が居りました。今も西安の畢慶公園には大きな御影石の塔が建てられております。これは中国の民衆によって仲麻呂が認められているということです。その他，空海，道元など多数の僧が中国から教典，土木技術などを導入しました。このころ唐から唐招提寺を創建した鑑眞が来日し，天台宗を開きました。安土桃山時代にはポルトガルから鉄砲が伝来し，キリスト教の宣教師が渡来しました。秀吉の朝鮮進攻の際は多数の陶工をはじめとする工人が日本に連れてこられました。日本の焼物の元祖はこの人達によっていると言っても過言ではありません。

江戸幕府約二百七十年（1603年～1869年）の間も長崎の出島を窓口にほそぼそとオランダとの交易が続けられました。幕末にはアメリカ，イギリスなどによって開国を迫られ，明治政府（1869年頃）になってからヨーロッパ系外国人が多数来日しました。英語の先生，機械技術者，鉄道技術者，建築家など，御抱え外人がわが国の文明の発展に大きく寄与しました。これらの人々の多数が今も横浜外人墓地に眠っています。

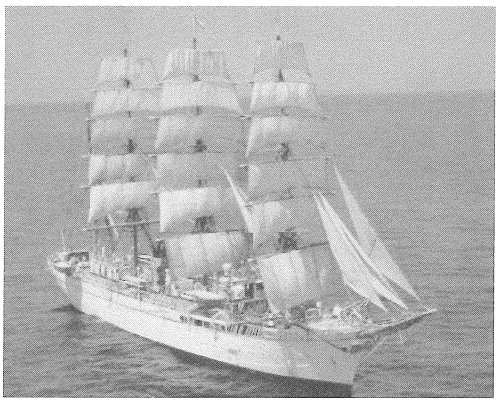
わが国からもこれら先進国に多数の学徒，軍人，民間人が出掛けて先進国の文化と文明を吸収しました。

1945年８月15日第２次大戦敗戦後は連合国兵士とのその家族が多数全国の基地周辺に滞在しましたが，今日進行している国際化はこれら過去のものとはかなり異なる交流であると思います。

現在大きな問題となっている米の輸入自由化や各種障壁撤廃，貿易摩擦の解消など国際化のための課題は数多くありますが，国民一人ひとりにとっては，国際化は好むと好まざるとに関わらず，多数の外国の人々の来日によって迫られています。この大きな時代の波を止めることはもうできません。

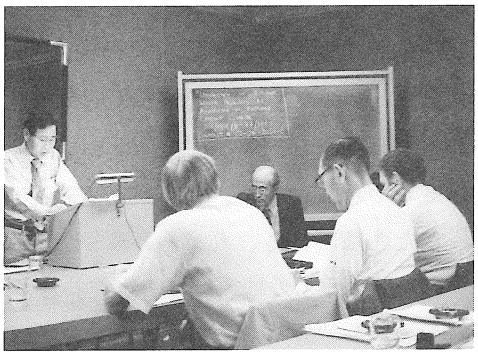
私たちはこれらの人々とどうしたら平和に互恵平等に生活して行けるかを本気で考える必要があります。「地球は皆一家族」という標語がありますが，既に述べたようにわが国は千数百年前から諸外国の援助を受けて発展してきました。今日，日本は世界の人々から経済大国として認められるようになりましたが，かつての恩恵に報いるためには，援助を必要としている国の人々に「できるだけのことをする」のが人間として成すべきことと思います。わが国に住んでいる外国のひとり一人と，彼等の母国とスマートに交際して行くためには，先ず，世界共通語といえる英会話がなんとかできるようになる必要があります。

“r（アール）”と“l（エル）”の発音の区別ができないとか，“boat；船”と“bout；試合”の発音が区別できないなどとは言っていられません。材研の諸君は大変若く，これから何十年もこれら外国の方々と一緒に仕事をし，また外国に出かけて仕事をしたり，中には外国の人をベターハーフとされる方もありましょう。とにかく，「俺は外国語は駄目だ！」などとは言っていられない時代を生きて行くのですから，日頃から心がけて先ず英会話の勉強をはじめてもらいたい。私に関しては，もう少し英語が達者であれば，別の展開があったかも知れないと思うのですが，既に遅きに失したと言う感があります。　（顧問教授：笠井芳夫）

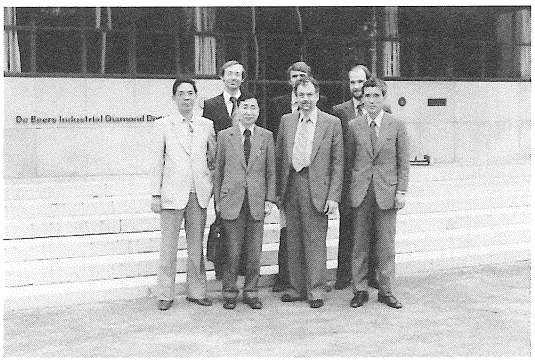


帆船・日本丸　東京商船大学の練習船　2300トン（日本肢体不自由協会発行絵葉書より）

英国・BREに滞在したときの研究室の仲間たち(1979.05)。左端がG.J.Osborn氏，いまでもカードの交流がある。その隣がDr.Nixson



米国・サンフランシスコにおける日米科セミナーで発表する笠井（1979.09）
中央の黒板の前が樋口芳郎先生，その右が国分正胤先生



英国・ロンドン郊外，デビアス社の前。
前列左から平賀友晃氏，笠井，１人おいて毛見虎雄氏

笠井が英国に滞在しているとき，則子が７月中旬にロンドンに来て，英国中西部のHeleford に移り，二人で民宿から英語学校に３週間通った

(3)　学協会誌の巻頭言・随想

問題提起　材料・施工の問題点　（建築雑誌：1969.06）…50

巻頭言　建設廃業物の資源化をめぐって　（建材試験情報：1977.08）…53

巻頭言　コンクリート非破壊試験の進歩　（建材試験情報：1990.04）…55

巻頭言　セメント産業はごみ戦争の救世主
（Ecomaterial ForumNews No.27：2000.07）…57

随想　右と左　（セメント・コンクリート No.425：1982.07）…59

随想　とっておきの話　（コンクリート工学 Vol.30，No.8：1992.08）…61

随想　この社会は病んでいる　子供こそ社会を救う力
（コンクリート工学 Vol.41，No.2：2003.02）…64

解説　鉄筋コンクリート構造物の非破壊試験特別研究委員会の
生い立ちとシンポジウムへの期待
（コンクリート構造物の非破壊検査への期待 論文集：2003.07）…66

随想・研究　タイルの浮き・剥離は永遠の課題か
（月刊 建築仕上技術 Vol.29，No.342：2004.01）…70

解説　コンクリートのひび割れは宿命か，抑制できるか
（建築技術：2006.06）…73

随想・研究　インテリジェント・アイ　コンクリートと共に歩んだ45年
（首都圏生コンクリートだより No.66：2000.summer）…76

随想・研究　コンクリートはまだまだ面白い材料である
（コンクリートテクノ 臨時増刊号：2006.09）…79

笠井賞贈呈の際におくった言葉　（2006.03-2009.02）…82

学会賞受賞論文　コンクリートの初期性状に関する研究
（建築雑誌 Vol.89，No.1083：1974.08）…84

解説　セメント協会論文賞を受賞して
（セメント・コンクリート No.341：1975.07）…90

2009年日本建築学会教育賞（教育業績）建築材料およびコンクリートの
教育に関する長年の貢献　（建築雑誌 Vol.124，No.1593：2009.08）…93

建築雑誌（1969.06）

問題提起

材料・施工の問題点
—材料のえらび方をめぐって—

材料・施工部門が直面している諸問題を取上げて，これをどう解決し，あるいはどのような方向にすすむべきかについての問題提起としたい。この一文は主として関東支部研究委員会材料部会のメンバーにお集まりいただき内容の方向づけを協議し，執筆は各分担者に一任したものである。（以下笠井芳夫の分担したもの）

●材料のえらび方の混乱

建築をつくる（創造する）ということは，どういう空間をつくるかということであり，材料の選び方から見ると，空間を構成するための材料をどうえらぶかということをぬきにしては考えられない。

材料のえらび方に関連して多くの試みがなされている。用途別材料（学）・部位別材料（学）・材料設計法・性能設計・BE（Building Element，建築要素，屋根，壁，床などに分類してその機能，材料，構法などを追究する），材料計画・チェックリスト……まさに混乱ともいえるような現状である。これらは，方法においてそれぞれ相違はあるが，何れも材料を合理的にえらぶ方法あるいはよりよい構法（設計）を目指している点において一致する。

このような状況に到った原因はいくつかあげられようが，その最たるものは，建築材料（学）として確立されているものが，材料の基本的性質のみに偏っており，建築の材料をえらぶことが困難になってきたからである。

そうしてこの混乱はそのまま材料教育の問題点として，解答を迫られているところでもある。材料に関係する人々は材料のえらび方を確立するための態勢をつくるべきである。

●材料・施工の領域，分化と統合

建築（学）において，従来から行なわれている材料・施工・構造・計画……などのような分類に対し，これらの境界における学問・技術の発展がめざましい。

この場合境界領域における学問・技術をどのように分類するか，常に解答を迫られている。本来分類というものは整理のための便法であるが，それだけに意義の大きいものである。境界領域にある学問・技術がとくに一本立ちするまでにいたっていないとき，あるいはその必要がないときは，もっとも近い部門に包含されるか，内容によっては複数の部門に分割されるべき